# 北欧 福祉と教育 街歩き

## 5 学ぶこと はたらくこと

薗部英夫＝文・写真

**メモ〈5〉**

**スウェーデン**
人口920万人
首都＝ストックホルム（80万人）

障害者は人口の15.7%。特別なニーズがあり特別な支援を必要とする人という広義な概念。

社会的就労5万人、政府持株100%会社の「サムハル」に約2～3万人、他はデイケアセンターなどで活動しているという。

by Kinbe & Ryo

ストックホルム市のシェアールホルメン地区にある高校を訪ねた。肢体不自由の子らが学んでいるというその学校は、4つの高校が建つ一つの敷地内にあった。

目的の障害児の高校（Riks Gymnasiet）は、国立で学生寮もある。他の3つは市立で、演劇やダンスを学ぶ芸術高校、自動車整備を学ぶ工業高校、外国語を学ぶ国際高校だという。玄関とロビー、食堂、図書館は共有している。国際高校の外国語の授業を受ける障害児もいるそうだ。

スウェーデンでは「場の統合」といわれた「インテグレーション（統合教育）」は、こういう形でも実践されている。

［上］レストラン（デイケアセンター）の厨房で
［下］工場跡を素敵に改造したレストランは労働者に人気

校長が強調していたのは、「独立して生きる」こと、「自分を見つけて、将来何をしたいか見つける」こと、そして「有意義なフリータイムを探せる力」を身につけることだ。

＊

知的障害児の特別高校もあった。市立リンデパーケン高校は、4年間、国語、算数、体育、創造、社会科などを学ぶ。「いいところを伸ばす」教育だ。知的障害があれば、義務教育は「積極的差別是正措置」(注)によって10年間が保障されている。

昼時に、「レストラン専攻」の3年生が「実習」として、おいしいランチをサービスしてくれた。

＊

卒業生たちが働く人気のカフェテリアが地域にあり、それがデイケアセンターだと聞いて、レストラン「グラサードゴンゲン」を訪ねた。

工場跡を巧みにデザインした、明るくて清潔な素敵なレストランだ。50人の障害者が働き、18人の市の職員がサポートする。



「レストランにとりくむデイケアセンターは全国に広がっています。かつてロックバンドの演奏活動がトレンドのときがあったが、食事はいつでも必要なことだからね」とスタッフ。

厨房では、卒業生たちが、じつに一生懸命で、楽しそうに働いている。

「高校で、レストランのことや手作業などを学び、〝私はなにもできない〟のではなく、〝私はニンジンがむける〟〝ジャガイモの皮がむける〟〝タマゴの殻を割れる〟。だから、あなたがいないとニンジンが、ジャガイモが、タマゴがお客さんに出せないよね」

「そんな体験から、自信と責任感が生まれ、喜びが感じられるのではないでしょうか」と施設長が言う。

＊

自分たちの仕事が、お客さんを喜ばせ、感謝される。みんなで調理したり、接客できるのは楽しい。

生活の基本は障害者年金だ。同年齢の市民と同じ程度の所得がある。だから税も納める。地元でとれた新鮮な食材を使い、ゴミや残りものはバイオガスになるようにエコ処理を徹底する…。

11時をまわると、地域の会社の労働者たちの長い行列ができていた。

＊

初代全障研委員長の田中昌人さんが、滋賀のあざみ寮・もみじ寮の寮生劇の実践につぎのようなコメントを寄せていた。

「人間は発達していく上で自分を変えていく力を生み出していくわけです。これまで乗り越えることのできなかったことを成し遂げ、新鮮な気持ちの流れをつくっていく、そのことを通じて、改めて自分をとらえ直し、内面を豊かにしていくバイパスをつくる。

このバイパスをもつことによって、手をつないで育ちあう自制心が育つ」。

人は、学びはたらき、そして手をつないで育ちあうのだ。

教室でみた教材

［上］じゃがいもの総合学習中（市立リンデパーケン高校）
［下］肢体不自由児の特別高校は芸術、工業、外国語高校と統合されていた。現地の高校生たちと

(注) **積極的差別是正措置**

「アファーマティブ・アクション」。障害者権利条約の「理にかなった条件整備」としての「合理的配慮（リーズナブル・アコモデーション）」とともに、障害ゆえの「マイナス」を社会的支援により「ゼロ」とするための積極的な特別措置のこと。

ストックホルム市では知的障害児の場合、高校は希望があれば2年間の延長も可能。教育はすべて無償。

［参考文献］
社会福祉法人大木会編『ロビンフッドたちの青春 ―ある知的障がい者施設・30周年の演劇実践記録』中川書店

そのべ ひでお 1956年群馬県生まれ。85年より全障研事務局長。日本障害者協議会（JD）理事・情報通信委員長。北欧の旅含め、詳しくはホームページ http://www.nginet.or.jp/kinbe/